

## 圏外のアンテナ

[カイカソウ]の巻

夏の午後だった。これから始まる会議で、取り組んでいる広告キャンペーンのコピーが決まる。賭場（とば）に向かうギャンブラーのような鼻息で、わたしは表参道を歩いていた。

その時、すれちがった女性がこちらを凝視するやいなや「あ！」と、大きな声をあげた。「ん？」と見ると、プイッと目をそらすので、まわりこんで「どうしました？」と、聞いた。「あなたの顔に珍しいカイカソウが出てたので、つい」と、その人。

「カイカって、文明開化？」と、わたし。「いいえ、花よ。開花相！」と、その人。

「イミはなあに？」と、尋ねると「いまはまだ勉強中なので、イミはいえませんが」と、その人は眉をひそめた。

「じゃ、卒業したら連絡して」と、名刺を押しつけ、わたしは走りはじめた。

まずい。大切な日に、遅刻確定である。信号待ちで振り返ると、遠ざかるその人の後ろ姿が見えた。

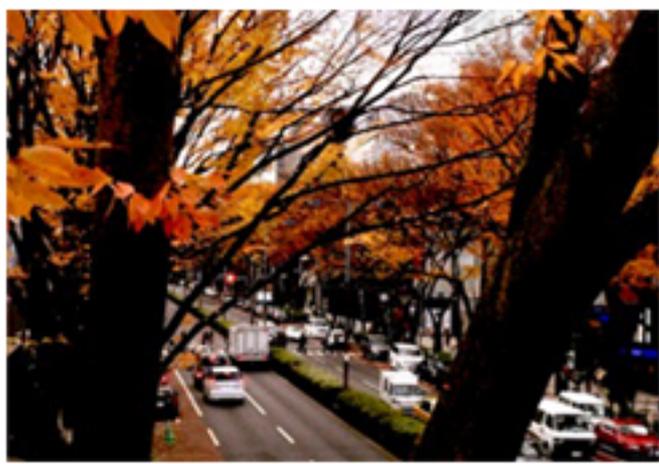
開花というくらいだから、きっといい卦（け）なのだろうと、そのまま、忙しさにまぎれて過ごしていた。ある日、仕事の合間にふと、その不思議な言葉を思い出して、ネットで検索をかけてみた。

すると、同じ手口で声をかけられ、何万円もする占いをすすめられた話がちらほら。新卒の勧誘ではないか。

なあんだ〜と、残念に思うじぶんがいた。

人はみな、ふいに訪れる明日への希望を、そっと心にとめて、生きている。

=2012年12月6日掲載=



時折変わった人に出会う街、表参道の秋